

検証・浦和電車区事件の真実 No.40

民主化闘争情報 [号外] 2008 年 8 月 11 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第40回 職場を去るY氏に無言の被告たち

2001 年 7 月 31 日、ついに、Y 氏 (当該事件被害者) は JR 東日本を退職した。退職の辞令を渡した浦和電車区 I 区長が、Y 氏に「すみませんでした」と頭を下げたのが印象的だった。

JR 東日本は二度と利用しない！

区長室から出た Y 氏は、廊下で散々にいじめられた大湊被告に出会ったが、何も言われなかった。自分の退職に満足しているようだった。さらにロッカーを整理していると、隣に上原被告が来たが、彼も何も言わなかった。Y 氏はロッカーを思い切り「ボタン！」と閉めて立ち去った。無言のささやかな抵抗だった。

孤立状態の中で、何人かの国労の組合員は、顔を合わせた時に励ましの言葉を掛けてくれた。Y 氏は御礼を伝えたいと思い、感謝のメッセージを書いて、ある国労組合員の下駄箱に入れた。

最後に、事務室で制服や備品などを返却した。事務係に「社員証があれば、年度内は JR の割引購入券を使えますよ」と言われたが、「社員証は要りません」と断り、会社に関わる一切のものを返却した。Y 氏は「JR 東日本は二度と利用しない」と心に決めた。JR 東日本沿線に居住する Y 氏は、今日もなお「復職までは JR 東日本を利用しない」と固く誓い、これを貫き通している。

最後に浦和電車区の玄関を出る際、業務用掲示板を見ると、自分の名前と「退職を命ずる」と書いた書面が貼ってあった。門を出てしばらく歩いて振り向くと、この間まで自分が運転していた京浜東北線の電車が見えた。Y 氏は自分を退職に追い込んだ JR 東労組への怒りを抑えられなかった。悔しくて、腹立たしくて、しかたなかった。

職場にしやすい環境を与えたのは分会の指導性の弱さ...!?

2000 年 12 月末から勃発した浦和電車区での JR 東労組組合員による Y 氏に対する執拗な集団的な恫喝や糾弾行動は、2001 年 7 月、Y 氏が退職させられる形で終焉を迎えた。

JR 東労組浦和電車区分会は 9 月 9 日に開催した分会大会で、次のように総括している。

(Y 問題について) 分会としては組織破壊攻撃と判断し、拡大闘争委員会を設置し、これに抗する闘いを全組合員で創り出してきました。...(中略)...3 ヶ月余りにおよぶ闘いの中で...組織破壊攻撃は絶対に許さないことを全体で確認し、Y を脱退へと追い込むことができました。しかし、脱退してからの Y に対しては追求(マ)が甘くなり、口をきかない、無視をするなど逆に職場にしやすい環境を与えてしまったことは、分会の指導性の弱さでありました。結果的には、Y 自身より退職の意思表示があり、7 月 31 日付けで退職しました。

会社の仲間を「職場にしやすい環境を与えてしまったことは、分会の指導性の弱さ」とは、これがまともな労働組合の認識なのか。彼らが Y 氏を脱退に追い込んだことは火を見るより明らかだ。ヒューマニズムの欠片もない、何と、陰湿な組織であろうか。(次号に続く)